矢吹町文化財報告第４集

大久保遺跡発掘調査報告

矢吹町教育委員会

大久保遺跡発掘調査報告

矢吹町教育委員会

序

大久保遺跡は泉川をはさんで東岸に中畑観音山館、その西岸の台地に対峙する形で存在してます。昭和50年の秋に土地所有者吉田哲人さんが畑地を開こんした際、遺跡が発見され、矢吹町教育委員会に調査を依頼されました。そこで委員会では埋蔵文化財緊急発掘調査を実施し、記録を保存することにした次第です。調査は寒冷な冬期間でもあり、悪条件の中で進められながらも、大型の住居跡１基がほぼ完全な形で確認され、遺跡の性格が明らかになりました。

ここに調査・整理にあたられました担当者の永山倉造先生はじめ、調査員や、又御多忙のところ御協力いただきました各位に、厚く感謝申し上げますとともに、本報告書が広く各方面で御利用御活用いただければ幸いであります。

昭和55年11月1日

矢吹町教育委員会教育長　酒井正敏

目　　次

序 …… 教育長 …… 1

Ⅰ 例　　言 …… 3

Ⅱ 位置と地形 …… 3

Ⅲ 周辺の遺跡 …… 3

Ⅳ 調査経過 …… 4

Ⅴ 遺構について …… 4

Ⅵ 出土遺物 …… 5

1 土師器 …… 5

2 須恵器 …… 8

図　　版 …… 9

Ⅰ 例　　言

1. 調 査 主 体　　矢吹町教育委員会
2. 調査の目的

昭和50年秋、個人開発に伴う開墾によって発見された埋蔵文化財の発掘調査を実施した。

3. 調 査 期 間

昭和51年２月28日（土）から昭和51年３月28日（日）までのうち６日間

4. 調査担当者　　須賀川市立博物館　学 芸 員　永 山 倉 造
5. 調　査　員　　矢吹町教育委員会　社教係長　星　圭之助
6. 調査協力者　　円谷　正、斎藤二郎、小針　茂、陳野秀敏、吉田哲人（土地所有者）
7. 土器の実測は、阿武隈考古学研究会員大野昌子があたり、写真及び内容は永山倉造があたった。

Ⅱ 位置と地形

遺跡は矢吹町のほゞ中央部にあり、中畑の集落を取り巻くように流れる泉川の西岸台地上の遺跡である。西に牡丹池が、南に松房池がある。古代の集落跡である。この遺跡は泉川の氾濫原を見下ろす台地で東西約 200ｍ、南北約 150ｍの広さを持ち南にゆるく傾斜する平坦地である。水田からの高さは約５ｍで、中世には、中畑観音山の館主中畑氏の重臣の居館跡と伝えられ、遺跡の西側竹藪中に板碑が２基氏神として祀られている。

Ⅲ 周辺の遺跡

大久保遺跡は古墳時代６世紀後半から７世紀にかけての遺跡と考えられるところから、周辺の古墳と深いかかわりあいを持つと考えられる。舘ノ越横穴群、寺山古墳、下荒具古墳群などとの関係が考えられ、近くの行馬（やらい）遺跡、国神遺跡、六熊遺跡など古墳時代の集落跡に先行する時代のものと考えられる。

Ⅳ 調 査 経 過

2月28日（土）工事を中止した遺跡において教育委員会立会いのうえ調査打合せを行なう。すでに表土と包含層の一部はブルトーザーにより削平されたため、住居跡の輪郭は黒色土の落込として確認され、竪穴の一辺9ｍ×9ｍの住居跡であると推定された。

調査はこの住居跡を4分し北東をA、北西をB、南東をC、南西をDとした。Aから掘込を行なった。遺構の南北に後世に掘り込んだ溝状遺構が検出されたが時期は不明である。つづいてC区の調査を進めたところ弥生土器の破片が多く出土した。3月6日（土）は朝から調査を実施する。A区の調査が進むにつれて精製された土師器が発見された。同層位から鉄滓や鞴（ふいご）の羽口が出土した。C区からは弥生時代の竪穴住居との切合いが検出されたが弥生時代の住居は土器の破片が少量発見されたのみである。3月7日（日）前日に引続き調査を進めた。B区北壁寄りから南北1ｍ×東西30㎝、深さ30㎝のピットが検出された。これは炉と考えられる北壁に近い焼土に隣接している。土器の発見が多いこの地点からは、復合して発見された弥生時代竪穴住居からのものと考えられる打製石斧や弥生式土器の破片の出土も多くみられた。3月27日・28日はC・D区の南壁を中心に調査を進めた。南壁には出入口遺構と考えられる叩き状の遺構が検出され、この付近に土師器の破片が多く発見された。この精査と平行して実測を実施した。

Ⅴ 遺構について

竪穴住居跡、北壁 8.8ｍ、南壁 8.6ｍ、東壁 8.5ｍ、西壁 8.8ｍである。平炉が北壁中央部 1.1ｍ南にあり、住居の主軸はN－29°－Wを向く。南が出入口と考えられる。面積は約76.7㎡で矢吹町では大きな住居跡である。壁高は北壁で18㎝、西壁22㎝、東壁12㎝、南壁は3㎝でやっと壁を識別するに止める。住居跡全体として南にゆるやかに傾斜している。

周溝はない。柱穴はしっかりした主柱穴4本がほゞ整然と配置されていた。柱穴は深さ35㎝～55㎝あり、直径は30㎝～40㎝である。北側のP_1・P_2・P_3はほゞ柱状の掘方を示したがP_4はほゞ円錘状である。P_4は柱が抜取られたとも考えられるが断定は出来ない。

炉は北壁中央部 1.2ｍにあり、ほゞ50㎝四方の焼土が赤く焼け固められ、中心部に径20㎝、深さ5㎝のピットがある。これは平炉と考えられる。

床面はローム層を掘り込んで構築され、ほゞ平坦である。P_3・P_4の柱穴の中間部は一段高く貼床があったと考えられるが西隅部は深く掘り込まれ撹乱によるものとみられる。

出土遺物は多く須恵器杯、甕などは北壁近くから検出された。土師器も同じく北壁寄りに多く出土した。ほかに土師器が南壁の出入口付近から検出されている。

この外注目される遺物として鉄滓、鞴の羽口の破片が北壁近くから発見された。これらはこの遺構内、または近くに鉄器の鍛造の工房跡があったと考えられるが、はっきりしない。

Ⅵ 出 土 遺 物

1 土 師 器

（1） **杯**

ほゞ完形で高さ8㎝、口径11.5㎝である。色調は内外とも茶褐色である。口縁部は内面でかすかに外反し、内面に陵を有し、内外とも横ナデされている。外面体部と底部は手持篦ケズリのうえ全面にナデにより調整されている。

（2） **杯**

高さ6㎝、口径13㎝で、内外とも黄褐色を呈している。口縁部はゆるやかに外反し、内外ともに横ナデがある。外面体部にも横ナデの形跡が認められる。底部は手持篦調整による。内面は使用度がはげしく調整等不明である。

（3） **杯**

破片である。推定高さ約6㎝、口径約15.5㎝、厚さ4㎜と薄手である。色調は赤褐色を呈し、口縁部は外反し、内外ともに横ナデによる。外面体部は篦ナデにより調整されている。内面は使用によってアレており不明である。

（4） **椀**

底部のみである。8×9㎝の破片で、内外面とも赤褐色で、内面は放射状の篦ミガキを施し、外面は篦ケズリである。底部には円形（3㎝）の凹面がある。

（5） **杯**

破片であるが高さ推定6㎝、口径推定14.8㎝、内外面とも赤褐色を呈し、口縁部は外反し、外面は横ナデによって整形され、体部は手持篦ケズリによっている。内面は使用により磨滅して不明である。

（6） **椀形土器**

高さ推定60㎝、口径推定14.5㎝の破片である。つくりは薄手で底部は丸底と推定される。口縁部の立上りは孤状に内傾している。整形は底部から立上り部にかけての外側が篦ケズリで、口辺部は布引きである。内面は研磨されて滑沢を有し焼成・胎土とも同質で赤褐色を呈している。

（7） **椀形土器**

高さ 5.5㎝、口径11㎝、つくりが厚手で底部は丸底、口縁部の立上りは、かすかに縁取りを行って孤状に内傾して陵を有する。整形は底部から立上り部にかけての外側が篦ケズリで、口辺部が布引きである。内側は篦ミガキが全面に行なわれている。焼成・胎土ともに同質で内面は赤褐色で外面は褐色である。

（8） **杯**

⅓ほどの破片である。推定高さ約 6.8㎝、口径 11.6㎝である。口縁は外反し内面に陵を持つ。色調は内面赤褐色で外部は一部黒褐色の部分がある。口縁は内外ともに横ナデが行なわれ、外面体部は手持篦ケズリにより調整され、内面は主として横位方向の篦ミガキが施されているが上部に斜めの篦ミガキが認められる。

（9） **杯**

口縁から底部にかけての破片である。推定高さ約 6.5㎝、口径約15㎝である。内外面ともに赤褐色を呈し厚手である。体部は不明であるが、口縁はかるく外反している横ナデによって調整されている。内面は口唇部横位方向に篦ミガキがあり、陵線がある内部は篦ミガキの形跡が認められる。

（10） **杯**

破片である。推定高さ約 6.4㎝、口径約15.3㎝である。色調は内外面ともに黄褐色を呈し、口縁部は外反する。口縁部は横位方向の篦ミガキにより、外部は横ナデである。体部も手持篦ケズリによって調整されている。

（11） **杯**

破片であるが、高さ推定7㎝、口径14㎝。底部は丸底と推定され、厚さ 0.6 ㎝でやゝ厚手である。口縁は外反する。内外面ともにやゝ黄味をおびた赤褐色である。口縁部は内外とも横ナデ、内部は篦ミガキを施している。

（12） **杯**

破片であるが、高さ推定7㎝、口径12㎝で底部は丸底と推定される。厚さ 5 ㎜とやゝ薄手である。口縁は外反、内外ともに横位方向の篦ミガキが施され、内面に陵を有し、内面は放射状に篦ミガキが見られる。外側体部は全面に横位方向の篦ミガキが認められる。

（13）　**杯**

口縁から体部にかけての破片である。推定高さ８㎝、口径17.7㎝、内外とも黄褐色。体部は篦ケズリにより調整され、口縁部は横ナデがあり外反する。内面口唇は横ナデ、内部は篦ミガキがある。

（14）　**杯**

破片である。高さ推定約 7.5 ㎝、口径約16㎝と考えられる。色調は赤褐色を呈し、厚さは４㎜と薄手、口縁は外反し内部に陵を持ち、横位方向の篦ミガキがある。外部は横ナデにより体部は手持篦ケズリが施されている。内面は放射状の篦ミガキにより調整されているが底部は不明である。

（15）　**杯**

底部の破片である。色調は黄褐色を呈し、現存の高さ５㎝、径15㎝、底部は厚手の丸底で、手持篦ケズリにより調整されている。内面は放射状の篦ミガキが施されている。

（16）　**椀形土器**

高さ現況 4.5 ㎝、口径現況16㎝、つくりは厚手で底部は丸底と推定される。最大厚さ1.2㎝、口縁部の立上りは内傾すると推定されるが不明である。整形は底部から胴部にかけて篦ケズリが行なわれている。底部から口縁にかけて篦による沈線が施こされている。内面は体部下半を放射状に篦ミガキが行なわれている。

焼成・胎土ともに同質で赤褐色を呈している。

（17）　**椀**

破片であるが高さ推定９㎝、口径15㎝、体部最大径17㎝である。内外面とも赤褐色、厚手である。口縁は弧状に内傾する。内部は放射状の篦ミガキが施こされ内面底部は横位方向の篦ミガキが認められる。外側体部は全面に手持による篦ケズリが認められ、底部に篦による沈線が二本交差状に施こされている。

（18）　**小形壷**

現存するのは口縁と肩部である。推定体部径は 13.5㎝であるが、高さは不明である。胎土・焼成ともに良好で、色調は外面が赤褐色を呈し内面は褐色である。外面肩部から体部にかけて篦ミガキが施こされている。

（19）　**甕**

口縁部の破片である。推定径 16.5㎝、高さ 3.5 ㎝である。頸部はくびれ内部に陵をつくり、直立したのち外反して口縁部に至る。内外とも赤褐色を呈し横ナデである。

（20）　**小形甕形土器**

現存高６㎝、口径15㎝。口縁部はわずかに外反し、胴部は比較的張りをもつ。胴下部は

欠けているため不明である。

口縁部は布引が軽くほどこされ、篦ケズリ整形が行なわれ、一部に研磨が認められる。内面口辺部は丁寧に横位方向の篦ミガキがある。内部は篦ミガキが行なわれている。内外面ともに赤褐色を呈する。胎土・焼成とも良好である。

(21) **甑**

破片から復元した高さ24㎝、口径24.3㎝、底部の径7㎝、厚さ0.7㎝、大体において赤褐色を呈し、底部の穴は篦ケズリにより調整されている。体部は篦ケズリのうえにナデを施こしている。肩部から口縁にかけて外反し、横ナデが行なわれている。口唇部は横位方向に丹念に篦ミガキが行なわれ内部へ軽く湾曲し陵を有する。内部はタテの篦ミガキが丁寧に行なわれている。

2 須 恵 器

(1) **杯**

A柱の東床直上の出土である。¼程の破片であるが焼は堅く良好で灰白色を呈する。高さ推定4.5㎝、口縁1.1㎝、肩部にあたる部分に蓋に対応するためのものと思われる0.6㎝の段が形成され、蓋受けの高さは推定1.5㎝である。体部は横ナデにより整形され、肩から2㎝に陵をもち底部になっている。体部には縦に平行する沈線がある。内面も横ナデされている。

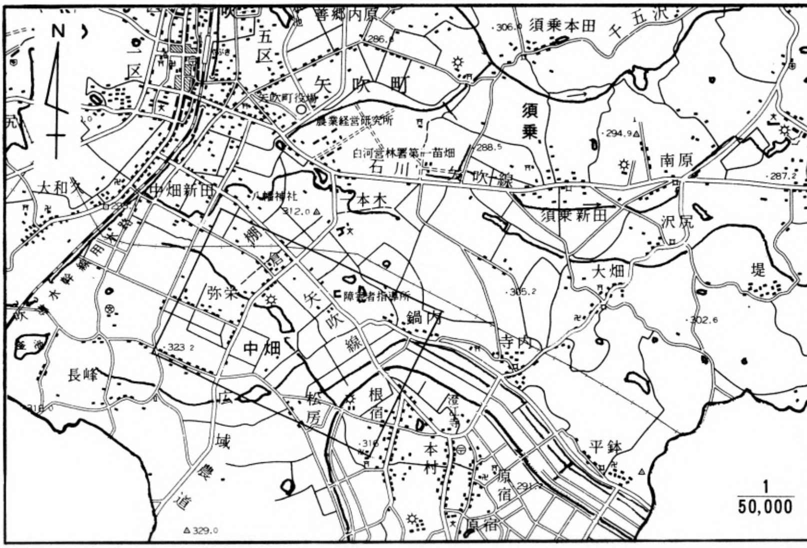
(2) **甕**

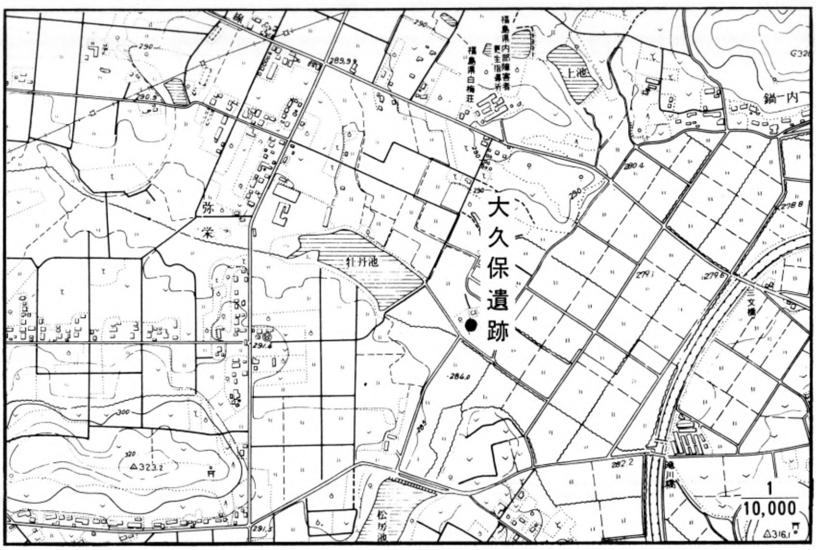
口縁部の破片である。推定口径は約28.5㎝、焼成は良好で灰色を呈している。口縁部は強く折反して直立し、一条の沈線を廻す。口唇部はかすかに凹み陵線を有す。内外面とも横ナデにより調整されている。

〔参 考 文 献〕

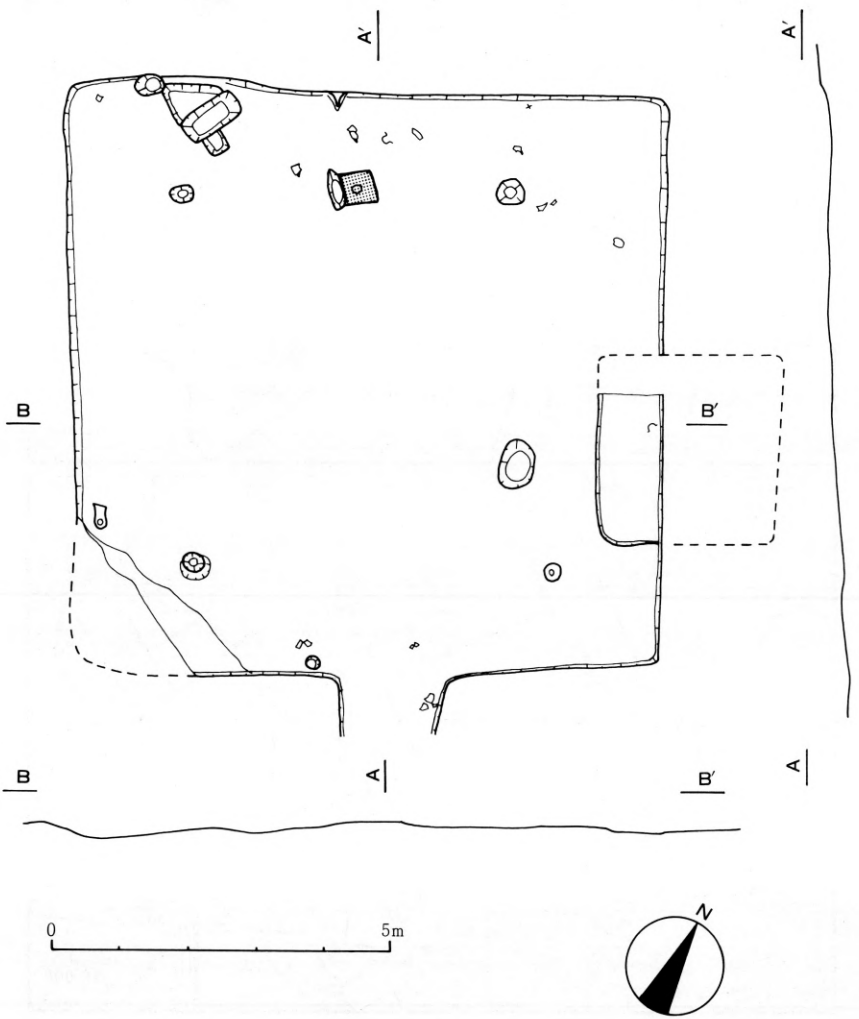
東北自動車道遺跡調査報告　第14編　七斗蒔遺跡　　図版34—92　　鈴木　啓（県）
母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ　第1編　　佐平　林（県）

図　版

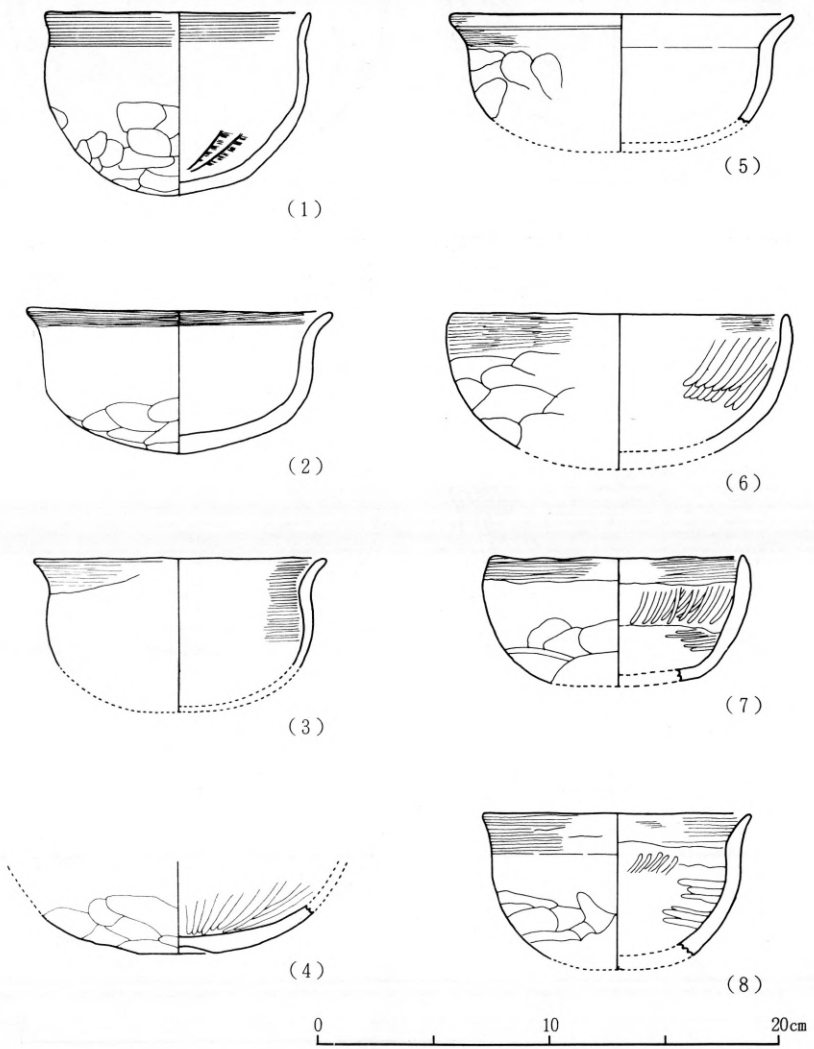

N
矢吹町
矢吹町役場
農業経営研究所
白河営林署第一苗畑
石川―矢吹線
須乗
須乗本田
千五沢
五区
一区
南原
須乗新田
沢尻
大和久
中畑新田
八幡神社
一本木
大畑
堤
弥栄
障害者指導所
矢吹線
鍋内
寺内
中畑
長峰
広域農道
松房
根宿
澄江寺
本村
原宿
平鉢
1
50,000

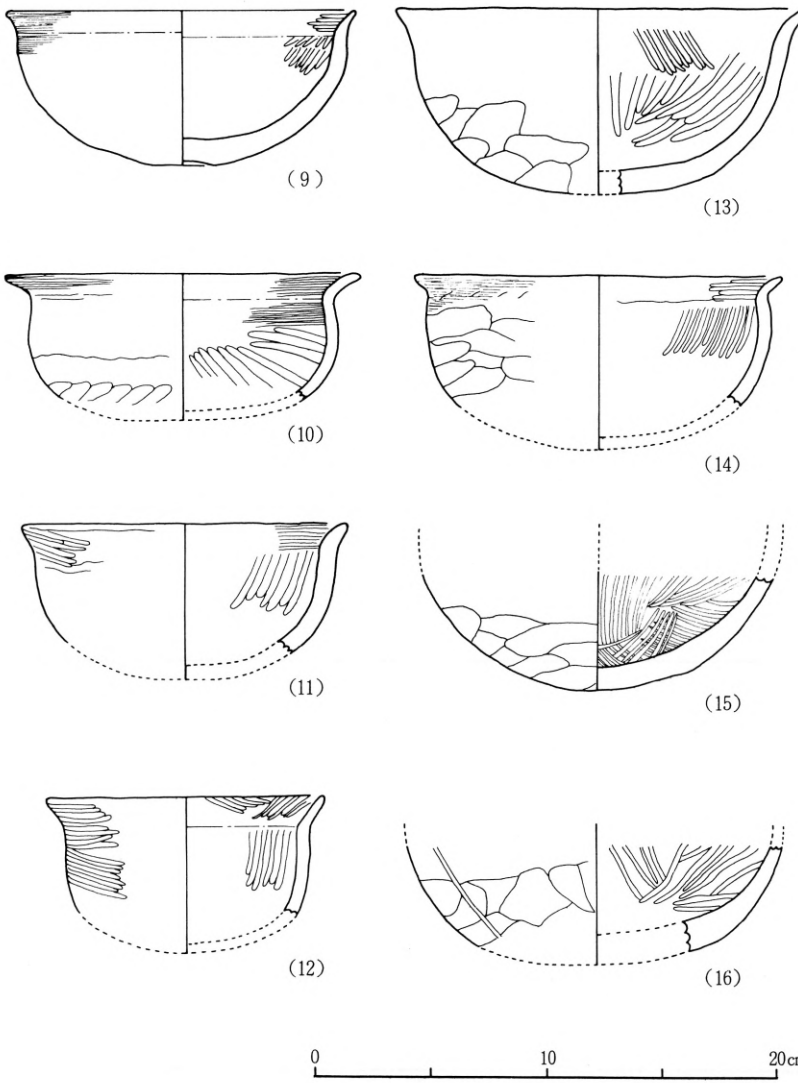

福島県内部障害者更生指導所
福島県白梅荘
上池
鍋内
弥栄
牡丹池
大久保遺跡
松房池
1
10,000

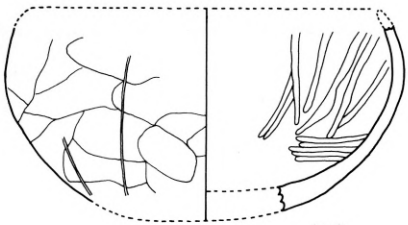
遺　　構



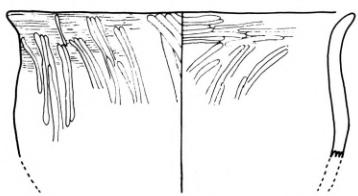
土 師 器



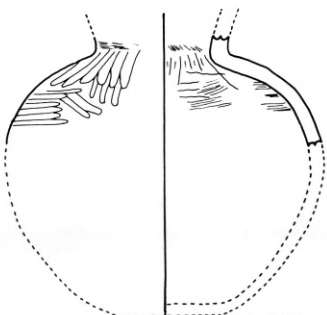

(9)
(13)
(10)
(14)
(11)
(15)
(12)
(16)
0
10
20cm



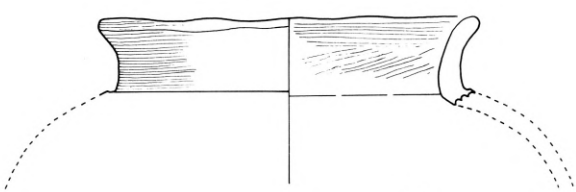
(17)



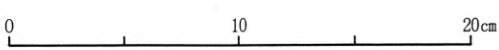
(20)

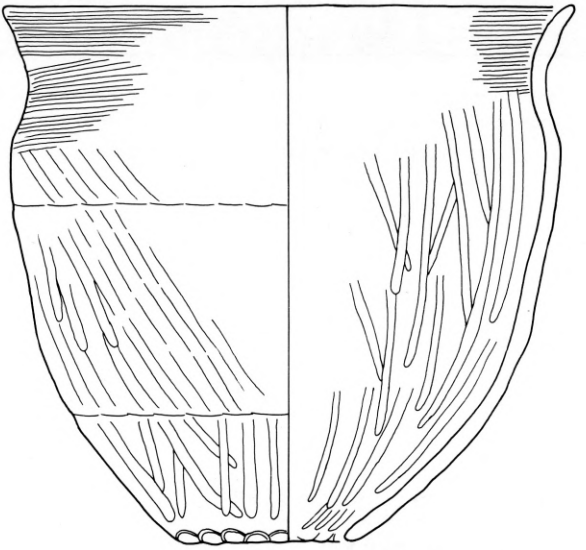


(18)



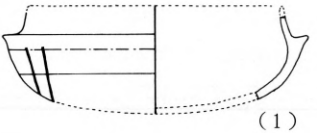
(19)



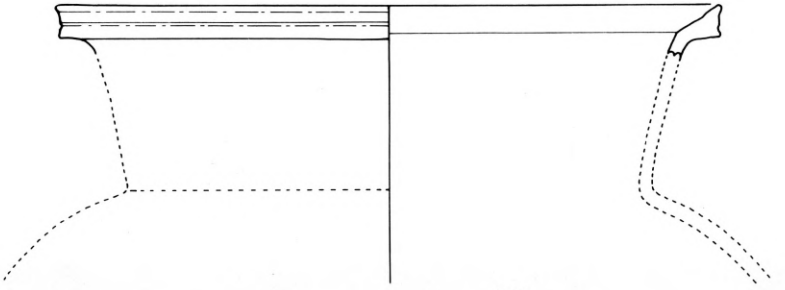


(21)

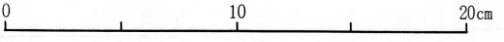
須 恵 器



(1)



(2)



住居跡全景

炉　　跡

鍛冶遺構

土師器　（1）

（8）

（2）

（9）

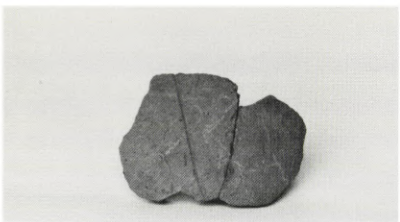
（5）

（10）

（6）

（13）

(15)



(16)

(17)

(20)

(21)

(21)

須 恵 器 (1)

矢吹町文化財報告　第4集

大久保遺跡発掘調査報告

編　集　昭和55年11月1日
印刷発行　昭和55年11月1日
発行者　矢吹町教育委員会教育長　酒井正敏
発行所　矢吹町教育委員会